



## 戦争の記憶を 次の世代へつなぐ

東京大空襲・戦災資料センター館長

吉田 裕 さん



全障研第55回全国大会  
(静岡2021) 記念講演講師

### 戦争と私

私たちの世代は、父親との世代間ギャップがとても大きかったと思います。父親は戦前の教育を受けた世代、私たちは戦後の民主主義教育を受けた世代で価値観の面でかなり大きなズレがありました。「男は歯を出して笑うものではない。台所をうろうろするな」、そういった価値観に対する反発が強かった。だから父親たちが語ろうとした戦争体験にも、「また昔の話をしている」と背を向けてきた気もするのです。一方で終戦から9年後に生まれた私は、親はもちろん小学校から大学まで学校の先生も戦争体験世代が中心です。地域や家族のなかにまだ戦争の記憶が息づいている時代を生きてきました。1995年に父親が亡くなり、その頃から親世代の体験に向き合う必要があると意識するようになります。亡くなってからしっかり話を聞いておくべきだったと後悔のようなものがあり、そのことが戦争体験にこだわって研究を続けるばねになっていると思います。

ベトナム戦争も戦争に関心をもちた大きなきっかけです。南ベトナムの秘密警察の長官が解放戦線の兵士を公開処刑するという有名な写真があります。それを中学生のころに見てすごくショックを受けた。頭の中が真っ白になるような怒りを感じました。私は基地の

街で育ったので、近所にはアメリカ兵の宿舎があり、母親が日本人で父親がアメリカ人の子と親しくなりよく遊んでいました。その子の父親がベトナムに派遣されることになった時、母親が泣き叫んでいた光景を覚えています。そのことも強烈な記憶です。

### 民衆史から伝える戦争体験

戦争の現実に対する想像力を培っていくことは、体験者の証言を聞くだけでなく残された資料や記録のなかからもできると思います。日本には地域レベルでも戦争体験の記録が豊富に残っています。たとえば部隊史、個人の従軍記、絵で体験を記録したものなど膨大な資料が民間レベルに存在している。それらは戦争に対する無念な思いをもっている人たちがどうしても伝えたいと思って書き留めた記録でしょう。記録を整理・分析し、次の世代に継承していくことが重要です。本来は公的な機関が関与する形で収集・保管し、公開するような戦争体験文庫をつくる必要があります。次の世代に伝えていくことが日本国憲法を支えてきた歴史意識、9条の基盤を固めることにつながっていきます。 (談)

よしだ ゆたか / 1954年生まれ。埼玉県出身。東京教育大学文学部卒業。一橋大学名誉教授。日本近現代軍事史、日本近現代政治史を専攻。近著に兵士側から戦争の実態を追った『日本軍兵士—アジア・太平洋戦争の現実』(中公新書)がある。